

【目的】大正中期～昭和初期は、「生活学」分野において生活問題研究の起点とされる。「家政学」と「生活科学」との異質性や同質性が論議される今日、この時期にさかのぼって「生活」概念や問題意識を再検討することは、今後、「家政学」概念を再構築していく上で意義のあることと思われる。

そのためのひとつの手がかりとして、本研究では、大正中期から提唱された生活改善をめぐる運動を取り上げ、その背景や目的、担い手について明らかにするとともに、運動の展開と得られた成果について考察を加える。

【方法】生活改善運動に関連する大正～昭和戦前期の新聞・雑誌・教科書その他の文献資料の調査・分析を行い、服装改良に関する記述を中心に考察を行った。

【結果】

- ①生活改善運動は、第一次世界大戦勃発から戦後恐慌へと続く景気変動や、米騒動・労働争議・小作争議が頻発する激動の中で浮上した「生活問題」の解決や、婦人解放の視点から「家庭の生活様式の近代的合理化」を目指して呼びかけられた。
- ②改善の中でも主要なテーマとされたのは服装改良であり、機能性・安全性・経済性から洋装が推奨された。
- ③改善の提唱者は、学者や医師、教員などの知識階級が目立つが、関東大震災以降の推進の担い手としてマスコミが果たした役割も看過できない。